

① 次の **文章1** は、建築家の隈研吾くまけんごさんと、医学者である養老孟司ようろうたけしさんとの対話です。これと、あとに続く **文章2** を読んで、あとの問題に答えなさい。(※印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

文章1

養老 ロシア社会論の袴田茂樹はかまだしげきさんが面白いことを言っていました。

ロシアの※サンクトペテルブルクに皇帝が作った真つ直ぐな道があるんだけど、それが1カ所だけ曲がっているんだそうです。それは、皇帝がこういうふうに通道を作れ、と線を引いたときに、手が弓か何かに当たって曲がってしまった、その通りになったんだそうです(笑)。
隈さんもそんなことはありませんか。

隈 いかにもロシア的なジョークですね。ロシア皇帝と同じ状況で建築を作ることはありませんが、僕は設計のときになるべく自分でスケッチをしないようにしているんです。

養老 ほう、それはどうして？

隈 線ってすごく重みがあるので、それが怖いんです。僕が何かつまらない理由で引いた線も、スタッフの立場になると、ボスが引いた線だからそれを尊重しないとダメじゃないですか。線を引くときなんて、今の弓の話じゃないけど、実はつまらない理由で曲がったりすることはいっぱいあるんです。

養老 やっぱり(笑)。

隈 5〜6人でしゃべりながらイメージを共有していくのが、僕にとつては一番いい。「だからこんな感じだよ」と僕が口で言っても、それをスタッフが見て、「あ、これだよ、これ」とか、「ここ、もうちょっと」とか、ア話をゆるやかに重ねていくのが僕のやり方なんです。

養老 そうはいつでも線を引かないと図面はできないでしょう。

隈 いくつかは線を引きます。でも自分でいきなり線を書くのと、それこそ皇帝の指示ではありませんが、絶対になっちゃいますから。

【中略】

隈 建築の※クライアントも、言ってみれば患者かんじやさんと同じで、※ヒエラルキーを望む人と、※フラットな関係を望む人がいて、相手によってコミュニケーションの仕方が変わってきますね。例えば公共の建物でも、町長さんのようなクライアントの中心的存在になる人がいますよね。設計というのは、その人と僕との共同作業になりますから、相手がある種の※シンボルズを欲しい人だったら、僕がいくら「負ける建築」と言っても周囲に溶けてとしまうような建築を作ろうとしたって、通用しません。そのときは、負けながらある種のシンボルズを作っていくような複雑なやり方をするわけです。

養老 隈さんの『負ける建築』には、そういうひねりが随所ずいじこにあって、

面白かった。

限 要は上手に負けていかないと、最終的にいいものはできない、ということなんです。相手という人間を知って、相手に合ったやり方をするということが、僕の仕事でも一番大事なんだと思います。単なる建築の技術ではなくて、人間観察眼みたいなものが相当必要な職業です。

養老 その話を聞いて感激します。根本的にはどの仕事も一緒ですね。**限** 解剖という、死体相手の仕事でもそうなのですか。

養老 本場にそうですよ。だってね、死体といたっていろいろですよ。じいさんもばあさんも若い人も全部いるわけでしょう。それとしばらく付き合うわけですよ。しかも肉体的な接触でしょう。相手がどういう人かって、絶えず頭にあるんです。

限 亡くなった人が相手でも、そう感じるんですね。

養老 そりゃあそうですよ。僕にとつては毎日お目にかかっているわけで、その意味では生きている人ですから。

限 その方の生前の来歴なんかはご存じないわけですよね。

養老 一切知りません。しかも相手は一切文句を言わない。僕の言うがまま、やるがまま。非常に特殊な体験なんです。これは、他の人には絶対に分かってもらえない感覚だと思いますね。例えば手を解剖するって嫌なんです。

限 手ですか。

養老 目も嫌だけど、手の解剖が一番嫌なの。僕らは素手でやるから、

作業としては、死体の手をまず自分の手で触るわけです。それってものすごく特殊だなと思いますね。だって相手が男だったらずしらないよ、そんなこと。女性にだって、普通はしないけどね。まあ、男でも女でも、俺が手を握ったら逃げるわね、生きていれば。そんな感覚を残しながら、解剖をするんです。

限 つまり身体の中で、手という部分にすごく意味があるということなんですか。

養老 そうです。だからいつも手の解剖をする場合は、時を選んでね、そこで気合を入れ直すんです。でも、自分がある年齢になって、忙しい中で手の解剖をやっていたときにハッと気が付きました。普通の感覚で相手の手を持っていたんですね。それまでずっと持っていた違和感が、いつの間にか消えていた。

限 慣れたということでしょうか。

養老 そう。だから僕、そこで解剖をやめたんです。相手が自分と同じになっちゃったということは、客観性がなくなっちゃったということだから。それから虫の研究をやっているんだけど、虫の方がはるかに違和感があるものね(笑)。

限 実は僕、手にすごい手術跡があるんです。

養老 ケガですか？

限 はい。ガラスのテーブルに右手を置いたら、割れてしまっ。そのときガラスで手首の内側をスパッと切って、筋も神経も、動脈以外はみんな切れちゃった。救急病院にかつきこまれたんですが、

1 回目の手術で筋を違うふうにくつつけられて、動かなくなってしまう。それでは具合が悪かったので、別の先生のところに行ったら、「これは人差し指と中指の腱をつなぎ間違えているよ」ということで、もう1回手術をして、つなぎ直してもらったんです。それでもリハビリをサボったので、あんまりよくならなかったんですが。養老 それは大変でしたね。

限 そのときにちよつと、人間の体に対する意識が変わりました。身体ってこんなにもろいのか、というか、すごく微妙なバランスの上で成立しているんだな、と。僕は今でも右手の指先の感覚があんまりないんです。右利きなんですけど、スケッチをしなくなったというのはケガのせいでもあるんです。以前はスケッチは結構得意だったんですが、それがダメになってからは、だったら右手が※不如意だということをもっと利用しようと思いました。

養老 そのケガは過労だね。だいたいそんなケガをすること自体が、通常とは違う状態ですよ。注意ができていない、要するに半分ヤケだったということです。

限 まさにその通りでした。そのときはちょうど講演会の準備をしていて、スライドがうまく集まらなくてイライラしていたんです。向こう側の箱のスライドを取ろうと思って、ガラスに手を突いたんですが、確かにヤケに近い状態で、思い切り体重をかけてしまいました。普段はもう少し気を付けながら体を動かしますが、そのときは、ガンとガラスの真ん中に手を置いて体重をかけたら、その瞬間、

スパーンといっちゃいまして。

養老 ※プロダクト・ライアビリティ（PL）法はあった時代ですか。

限 それ、自分がデザインしたテーブルでしたからね（笑）。自分でテーブルの足を作って、そこにガラス板を置いただけですから、自業自得です。

養老 いやはや。

限 都市建築を設計するには、自分が経験した苦痛も含めて、身体感覚が絶対的に大事なんだと思います。例えば超高層ビルでも、足元はすごく重要ですよ。もともと日本人って足元の感覚がものすごく研ぎ澄まされている民族です。それこそ1ミリの段差も察知するような感覚がある。だから畳の敷き方なんかも洗練されていたわけです。

（養老 孟司・限 研吾『日本人はどう住まうべきか？』による）

〔注〕

- ※ サンクトペテルブルク…ロシア西部の都市。かつて帝都だった。
- ※ クライアント…依頼人。顧客。
- ※ ヒエラルキー…上下関係。
- ※ フラットな関係…対等な関係。
- ※ シンボリズム…象徴。
- ※ 不如意…思いどおりに動かせないこと。
- ※ プロダクト・ライアビリティ（PL）法…製品に欠陥があった時、製造者の責任を問う法律。
- ※ 察知…感じ取ること。

文章2

建築はチームプレイですから、とにかく、パスを回していくことが大事。現代のサッカーだって、一人の選手の、ものすごく芸術的なドリブルではなくて、全体のパス回しで勝負が決まる時代になっているでしょう。

パス回しで大切なことは、※レスポンスを「※禅問答」にしないことです。禅問答というのは「オマエ、建築ってこういうもんじゃないだろう」とか、「そもそも建築とは」とかいうアレ（笑）。うちのスタッフは、スタッフ同士でも抽象的な議論はほとんどしません。かといって、ぼくが図面に線を引くと、発想が固定してしまうから、「ここはもつとバラけた感じがいいんじゃない？」とか「パラパラ感が足りないのかな？」とか、そういうナマで、少しバカっぽい指示を出し続けます。

〔中略〕

イテというプレゼンテーションがぼくの心を動かすのかというと、課題として提示した「場所」と正面から向き合い、「場所」から問題を抽出して、答えを導こうとする人です。それぞれの「場所」を出発点にできる人は、文字通り地に足が着いている。モノを見るとときに、上からではなく下から見るボトムアップのクセが付いているので、実際の※プロジェクトでも役に立ってくれます。

反対にダメなのは、日ごろの※妄想を、無理やりその課題にあてはめてくる人。結局、自分中心の人です。学問の世界なら妄想のたくましさも許されるのかもしれませんが、建築の現場では何の役にも立ちません。

（隈研吾『建築家、走る』による）

〔注〕

- ※ レスポンス：反応。返事。
- ※ 禅問答：何を言っているのか、はたからは分からない問答。
- ※ プロジェクト：計画や取り組み。
- ※ 妄想：根拠のない想像。

〔問題 1〕 ア会話をゆるやかに重ねていくのが僕のやり方とあります

が、隈さんの「やり方」とはどのようなやり方でしょうか。

文章 2 から探し、解答らんに合うように二十四字以上三十五字以内で答えなさい。(、や。も字数に数えます。)

〔問題 2〕 イというプレゼンテーションがぼくの心を動かすのかと

いうと、課題として提示した「場所」と正面から向き合い、

「場所」から問題を抽出して、答えを導こうとする人となりますが、隈さんがこのような人を評価するのはどうして

ですか。文章 1 から探し、解答らんに合うように二十四

字以上三十五字以内で答えなさい。(、や。も字数に数えます。)

〔問題 3〕 下に示すのは、文章 1 と文章 2 を読んだ後の、花子さ

んとある友達とのやりとりです。このやりとりのあと、花

子さんが示したと思われる考えを、四百字以上四百四十

字以内で書きなさい。ただし、下の条件と次ページの「きま

り」にしたがうこと。

花子 — 文章 1 と文章 2 を読んで、隈さんの建築家として

の姿勢から、世界の様々な問題に向き合う時の心構えを学ぶことができたと思います。

友達 — たしかに、隈さんが、様々なことを考慮に入れて自分の

意見を主張しすぎることなく建物を作っていることはわかりました。でも、それだと、自分らしさがなくなってしまうと思います。

花子 — それは誤解のような気がします。それに、私は隈さんの

考えを知って、これからの生活で心がけたいことが二つできました。

友達 — そうですか。花子さんの考えをくわしく教えてください。

条件 次の三段落構成にまとめて書くこと。

① 第一段落では、友達の発言の中で、誤解をしていると思う点を指摘する。

② 第二段落では、①で示した点について、文章 1 と文章 2 に

もとづいて説明する。
③ 第三段落には、①と②とをふまえ、花子さんがこれからの生活で心がけようと思っている点を二つ書く。

[きまり]

- 題名は書きません。
 - 最初の行から書き始めます。
 - 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
 - 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。
 - 、 や 。 や 「 などそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じま
すめに書きます。(ますめの下に書いてもかまいません。)
 - 。 と 「 が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、 。 」 で一字と数えます。
 - 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。
 - 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。
-